

「内航船の日」第3回目から見えて来たこと

全日本内航船員の会 事務局



内航船の写真と一般の人が交わる「大黒湯」ロビー

今年3回目を終えた記念日「内航船の日」は、その第1回目からずっと一般の人たちによって支えられています。

Twitter 上では、ハッシュタグ(#内航船の日)を付けて船の写真やイラスト等をツイートしてもらったり、完成した内航船の絵本「かもつせんのいちにち」を応援してもらったりして、海運産業や船員とは全く縁のなかった人のところにまで「内航船」に対する認知が広がり、

「内航船という言葉は初めて知りました」と言っ

てもらえるようにまでなりました。本当に有難いかぎりです。

絵本「かもつせんのいちにち」は、応援者が全国で購入してくれただけでなく、地域の学校や幼稚園、図書館に向いて個人で寄贈する動きにも発展しました。

次第に海運事業者の間でも話題となり、全国各地の船処（ふなどころ）で船主組合などの関係団体でも大量に絵本を購入し、それぞれの自治体に贈呈する動きまで起こりました。こうし

た産業側の取り組みは業界新聞や一般紙でも取り上げられました。絵本は、出版社の福音館書店でも例のないベストセラーになりました。

著者の谷川夏樹さんはその業績が認められ、山縣記念財団から今年2018年の山縣勝見賞を贈られることになりました。





絵本「かもつせんのいちにち」の完成には、現役の内航船員や海運会社、内航物流に係る様々な人たちが協力しています。乗船取材への受け入れから作画の段階にまで現役の船員も関わり、海洋国の絵本として貴重な作品となっています。

記念日「内航船の日」は、谷川さんが取材乗船中に、

「もっと内航船の存在を知ってもらいたい。船員たちが社会のためにこれだけ重要な仕事をしているのに、あまりにも知られていない。島国なのに！」

と考え、Twitter で記念日の提唱をしたのが始まり。

「7月15日はナナイチゴ。ナイコー。内航船の日と呼びませんか」

熱い思いの込められたメッセージは瞬く間に島国を駆けめぐりました。応援と共感が湧き起こり、ついには関東と関西で応援者たちが集まり、カンパによって日本記念日協会への記念日申請へ。2015年の冬、無事に記念日の認定を受けるまでになりました。この絵本が描かれなければ記念日「内航船の日」の誕生もなく、また多くの人々からの共感や応援がなければ「内航船の日」が今日まで育っていくこともなかったと考えています。

みんなの内航船の日

今年2018年は、ラジオの電波にも「内航船の日」が乗りました。FM大分で活躍しているDJ NAVEさんが、洋上にいる船員たちを応援している気持ちを伝えたいと考え、生放送番組で「内航船の日」を企画してくれました。「内航船」という言葉をこれまで聞いたことがないリスナーにも配慮して、内航船の紹介から内航船の魅力、内航海運での深刻な人手不足の問題まで熱く紹介してくれる放送となりました。

山口新聞や神奈川新聞でも「内航船の日」や「内航海運」のPRに絡む最近の動きが取材され掲載もされました。また、一般の方のお店でも「内航船の日」特別イベントが香川県丸亀のカジュアル bar「Garage bar OCEANS'11」で開催されたことが分かっています。

今年、記念日は誰でもが自由に盛り上げられる流れを起こしていました。

「みんなの内航船の日」。もともと内航船を応援者してくれる一般の人たちの思いから誕生し支えられてきた「内航船の日」。島国で過ごす日々の暮らしの中で、普段忘れがちな海上物流をイメージする切っ掛けを作ってみよう。ただのそれだけで、誰でもが「今日は内航船の日か」と言って始めることができるのです。

誰でも、個人でも、お店でも、会社でも、今から企画を立ててみて下さい。

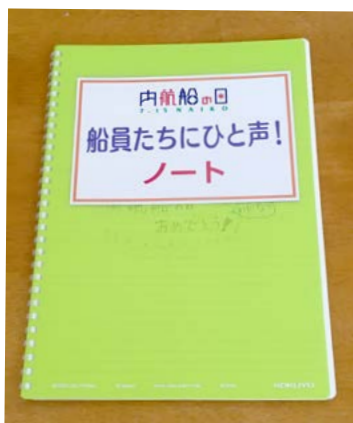
みんなで宣伝してあげましょう！

海から届ける写真展も 3 回目

全日本内航船員の会が「内航船の日」の7月15日から毎年開催している「海から届ける写真展@大黒湯」も好評をいただいております。都内墨田区の銭湯のロビーで、老若男女、本当に様々な人たちが洋上の現役船員たちから届いた「船員の海」に見入ります。



海から届ける写真展@大黒湯



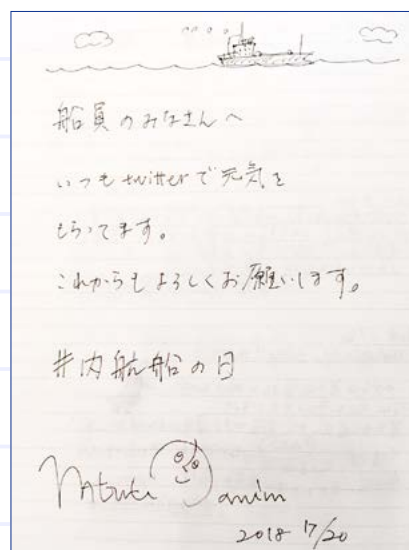
会場に設置している「船員たちにひと声! ノート」には、思わず目頭が熱くなるような海上物流への応援メッセージが書き込まれます。その直筆のメッセージはそのまま画像になって、連日 Twitter を通して洋上の船員の目にも届きます。船員の側からも喜びのツイートが発信されました。

洋上の船員世界と陸の一般の方が繋がる「奇跡」を目の当たりにできる海事イベントは、この写真展の他にありません。

「海から届ける写真展@大黒湯」も第3回目を迎え、全国各地から遙々訪れてくれる方の姿も目立ちました。ノートには「やっと来れました」という言葉が残されています。今年「内航船の日」の提唱者でもある谷川夏樹さんも初めて会場の大黒湯を訪れました。

「やっと、聖地にこれました…」

それは、谷川さんが山縣勝見賞の受賞式に都内を訪れた記念すべき夜でした。



谷川氏もノートへメッセージ

育っていく記念日

第1回目(2016)では、陸の応援者からいただいた記念日が「船員たち」と「陸の市民社会」とを繋げる「奇跡」を起こしました。第2回目には突然「内航船の日おめでとう」ツイートが溢れ、第3回目では「みんなの内航船の日」へと続きます。

とうとう記念日「内航船の日」は独りで歩きだしているような感じがします。振り返ってみると、変化も広がり方も自然で、まるで海洋国の豊かさを地中から吸い上げて育っていくかのようです。

イベント後も広がっていく記念日

写真展も終えた8月。大黒湯での写真展を見に来てくれていた東京港埠頭(株)の職員さんから熱いラブコールがありました。そして、「海から届ける写真展」は下町の銭湯を飛び出し、東京港のターミナルでの開催が決まり、「海から届ける写真

展@有明客船ターミナル」として共催が実現しました。

有明客船ターミナルでの写真展は9月15日から10月31日にわたって開催され、大黒湯で展示されていた作品からさらに厳選された写真が、大きなプリントとなって設置されました。

ちょうど期間中には、都内の小学校35校の社会科見学



があり、このターミナルを起点に海上バスで東京港を見学します。最終日までに、約2,200人もの児童が、港で繋がり合う地域の暮らしをイメージし、日本全国に広がる航路網と内航船の存在を知ることになりました。

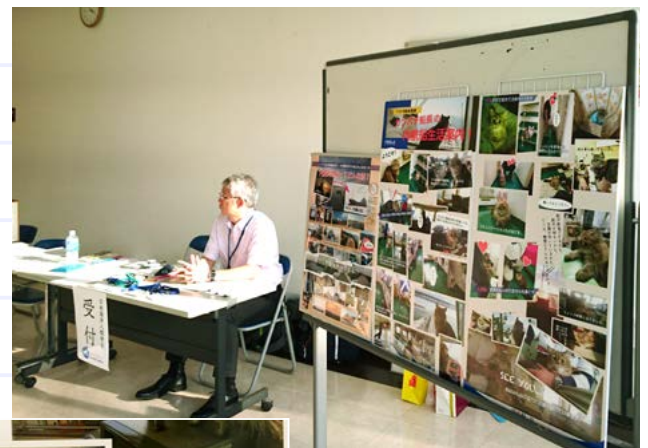
海から届ける写真展@有明客船ターミナル



裏面には「心の航路でつながってみよう」と書かれています

他にも、日本学術会議の協力学術研究団体「日本海洋人間学会」とも繋がることになりました。「海から届ける写真展@大黒湯」で特別展示されていた内航海運 PR パネルの2作品（「内航貨物船ってどんな船？ ～こうして船はやってくる！！～」と「カンパチ船長の内航船生活案内パネル」）が、9月22・23日に開催された学会の大会で設置してもらえたことになったのです。会場は東京海洋大学で、内航船の航海士にゃんこ

「カンパチ船長」のパネルは学生からも大きな反響があったと聞いています。



日本海洋人間学会大会



第3回目を終えて

この記念日は私たちをどこへ連れて行ってくれるのでしょうか。

誰にも分かりません。こんなふうに生まれて、こんなふうに成長していった記念日は他にないのです。

「今日は内航船の日だから、この柄の服を着てみたよ」

「たまには船でも見て来るか」

「これも、それも、原料までを考えるとみんな船で運ばれてるよね」

「さっすが島国」

「7月15日は内航船の日。でもね、本当は毎日が内航船の日なんだ」

島国住民が持っている共通項が呼び覚ました記念日「内航船の日」。

長い間、海洋文化社会の発展を求める想いは、海側から投げかけられるばかりのものでした。市民社会から贈っていただいた記念日に感謝をしながら、島国日本の海運産業の発展と未来を想像する時、私自身も多くのことを学ぶことになりました。

今、私たちは島国住民みんなで海洋文化社会を育てる喜びを感じあうことができます。「みんなの内航船の日」。(了)

平成30年12月16日